

Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される

三種の gīti 文献について(2)

望月 海慧

はじめに

チベット大蔵経の北京版の目録を見ると、テンギユルの中観部に Dīpaṃkaraśrījñāna (Atiśa) に帰される三種の gīti 文献を見ることができる。すなわち、

1. *Samsāramanoniryāṇikāranāmasamgīti*¹
2. *Caryāgīti*²
3. *Dharmadhātudarśanagīti*³

である。これらのテキストは、デルゲ版では彼の小部集に収録されており、彼のその他の顕教文献と同様に扱われている。しかしながらこれらの三つのテキストはもう一つのテキスト伝承があり、それらはテンギユルの秘密疏部にも収録されている。その秘密疏部には同じ著者に帰される、

4. *Vajrasānavajragīti*⁴

-
- 1 Tib.: *'Khor ba las yid nges par 'byung bar byed pa zhes bya ba 'i glu*. C. Zhi 253a5-254b7; D1. No.2313, Zhi 253a6-254b7; D2. No.4473, 11b1-13a2; G1. Tsi 346b5-349a5; G2. Gi 15a4-17a6; N1. No.1152, Tsi 257a2-258b6; N2. No.3377, Gi 13a2-14b4; P1. No.3152, Tsi 267b1-269a8; P2. No.5386, Gi 14b3-16b2. Cf. Richard Sherburne, S.J., *The Complete Works of Atiśa Sri Dīpaṃkara Jñāna, Jo-bo-rje*, New Delhi, 2000, pp.396-405. 校訂テキストについては、望月海慧「Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される三種の gīti 文献について [発表資料]」(日本印度学仏教学会第57学術大会, 2006年)を参照。本論を含めた gīti 文献の著述の経緯については、彼の伝記 *rNam thar rgyas pa* に記されている。Cf. Helmut Eimer, *rNam thar rgyas pa: Materialien zu einer Biographie des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)*, Wiesbaden, 1979, [383], Teil 1, p.279, Teil 2, p.322. また、本論のサンスクリットでのタイトルのみ、gīti ではなく、samgīti と還元されている。
 - 2 Tib.: *sPyod pa 'i glu*. C. Zha 216a4-217b2; D1. No.1496, Zha 215a6-216b4; D2. No.4474, 13a2-14a6; G1. Pa 291b1-293a5; G2. Gi 17a6-19a3; N1. No.211, Pa 231a4-232b6; N2. No.4473, Gi 11b1-13a2; P1. No.2111, Pa 218b8-220b1; P2. No.5387, Gi 16b2-18a5. Cf. Alaka Chattopadhyaya, *Atiśa and Tibet*, Calcutta 1967, pp.505-510; R. Sherburne, S.J., *op.cit.*, pp.406-413. 校訂テキストについては、望月海慧「Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される三種の gīti 文献について [発表資料]」を参照。
 - 3 Tib.: *Chos kyi dbyings su lta ba 'i glu*. C. Zhi 254b7-260b5; D1. No.2314, Zhi 254b7-260b5; D2. No.4475, 14a6-20a2; G1. Tsi 349a5-357b4; G2. Gi 19a3-26a6; N1. No.1153, Tsi 258b7-265a5; N2. No.3379, Gi 16a4-21b5; P1. No.3153, Tsi 269a8-276a4; P2. No.5388, Gi 18a5-25a6. Cf. Lobsang Dorjee Rabling, *Five Treatises of Ācārya Dīpaṃkaraśrījñāna*, Sarnath 1999, pp.66-214, R. Sherburne, S.J., *op.cit.*, pp.414-415. 校訂テキストについては、望月海慧「ディーバンカラシュリージュニャーナの『法界見歌』について (発表資料)」(第3回韓国仏教学結果大会, 2006年)を参照。
 - 4 Tib.: *rDo rje ḡdan gyi rdo rje 'i glu*, Tib. C. Zha 209a3-210b1; D. No. 1494, Zha 208a3-209b1; G. Pa 2801a1-281b4; N. No. 209, Pa 222a7-224a3; P. No.2209, Pa 210b3-212a5. 和訳と校訂テキストについては、望月海慧「ディーバンカラシュリージュニャーナに帰される『金剛座金剛歌』について」『仏教文化の諸相』(山喜房佛書林, 2008), pp.(159)-(183)を参照。

および、著者・訳者不明の

5. *Dīpamkarasrījñānadharmagīti⁵

というテキストも収録されている。また2と4には注釈書が存在し、テンギユルの秘密部に収められている。

6. Caryāgītivṛtti⁶

7. Vajrasānavajragītivṛtti⁷

これらのテキストの概要については、先行する論考⁸において報告しており、また4と7の和訳は既出なので⁹、本稿ではそこで掲載することができなかった残りのテキストの和訳部分を公表する。

『輪廻出離意歌』 和訳

インドの言葉で、*Samsāramanoniryāṇikāranāmasaṃgīti*

チベットの言葉で、『輪廻から意を確実に出離させると言う歌』

師たちに帰依する。

三宝に帰依する。

ああ。

行苦と壊苦と苦苦などの110の一切の苦から守って下さるその薬王に帰依をする。[1-4]

おい、さあ、友らよ！

輪廻の原因は煩惱と業で、煩惱が三界にあるならば、98である。汚れた川と交わり、領受と原因と対境と結合する力により生じる¹⁰。[5-8]

おい、さあ、友らよ！

5 Tib.: *Dī pam ka ra śrī jñā na'i chos kyi glu*, Tib. C. Zi 10a6-b1, D. No. 2374, Zi 10a6-b2; G. Tshi 13a3-6; N. No. 1201, Tshi 11b1-4; P. No.3202, Tshi 12b2-6. Alaka Chattopadhyaya. *op.cit.*, p.519. 本テキストは、9音節の14バーダからなる（ただし、第3, 5, 14バーダには「さあ (kye)」が付されており、10音節である）。

6 Tib.: *sPyod pa'i glu'i 'grel pa*. Tib. C. Zha 217b2-219b6; D. No. 1497, Zha 216b4-219a1; G. Pa 293a6-296b2; P. Pa 220b1-223b3.

7 Tib.: *rDo rje gdan gyi rdo rje'i glu'i 'grel pa*. Tib. C. Zha 210b1-216a4; D. No. 1495, Zha 209b1-215a5; G. Pa 282a1-290a4; N. No. 210, Pa 224a3-231a4; P. No. 2210, Pa 212b3-218b7.

8 拙稿「ディーパンカラシュリージュニャーナの『法界見歌』について」*The Proceedings of Korean Conference of Buddhist Studies* 3-1, 2006 pp.789-799; 「Dīpamkarasrījñāna に帰される三種の giti 文献について」『印度学仏教学研究』55-2, 2007, pp.(104)-(110)を参照。

9 望月海慧「ディーパンカラシュリージュニャーナに帰される『金剛座金剛歌』について」『仏教文化の諸相』（山喜房佛書林, 2008）、pp.(159)-(183)を参照。

10 1-8のバーダは9音節からなる。

これらの種々なるものから業が生じ、さらに煩惱は力から生じたものである。[9-10]

善と不善と無記であり、見て領受するものと、生まれてから領受するものと、他所で領受するものであり、不確定の白と黒との混合とである。[11-14]

輪廻の業は重いものと、近いものと、修習であり、その以前になした業は、前の前のものの異熟である。[15-18]

友らよ、考えなさい。無始より無明などの11は老死の辺際であり、12支の三つの部分は死の在り方である。内縁起が繰り返し輪廻する。[19-22]

無量のそれぞれの世において生と老と病と死の諸苦により繰り返し苦しみ、迷乱から輪廻したし、輪廻し、輪廻するであろう。[23-26]

ああ。

存在の道に疲れた客人たちは、苦を楽と見てからは疲れない。汝は、その意に常に執着しており、家畜と殊勝は存在しないと師は説かれている。[27-30]

師によりつかまれた賢い人たちよ、刹那刹那に五趣のすべてにおいて輪廻の苦という棘が刺さったような者に対して、骨の底から悲心を誰が起こさないであろうか。[31-34]

悪業によりこの輪廻の大海に何度も生まれ、老い、病気になり、何度も死ぬであろうというこのことを考えずに、境に執着して、自分はどのようになすべきか。[35-38]

おい、さあ、友らよ！

その三有の中にあるすべての苦も人による苦であると私は見る。子宮の苦はこのように存在する。すなわち、卵形、凝固体、楕円形、長方形、血肉位、結実、手足と次第に完成する。[39-43]

乳とバターにより栄養を取り、とても僅かな力でその背中で眠っている。少年が壮年と青年と老人となって再び少年になる。[44-47]

寿命は無常で、とても流動的で、瞬時にある力も存在するものではない。自分は確実に死ぬであろうとは考えない。友らよ、その人はとても珍しい。[48-51]

輪廻の過失と罪過を知らないで、四顛倒に住してから、自分は確実に死ぬであろうとは考えずに、境に執着して、昼夜無意味に過ごしている。[52-55]

ジャンプー洲で非時に死んで、確信を得ても、尽きることになるので、「繰り返し確実に死ぬ」と思うことは正しい。さあ、美しい者たちよ。[56-59]

「初夏に花が広がるこの時が生じるであろう。月の明かりにより照らされるこの秋が生じるだろう」と言うことをすべての人は喜び、「自分のこの寿命が尽きてしまうだろう」ととても喜ばなくなることはない。[60-63]

「今日、これをすべきである。今、これをすべきである。その後で、これとこれをすべきである」と、存在が動く本質を知らずに、無意味に意を堅固にすることを求める九生は、

死の主であるマカラの口に船が入るように、所作は彼岸に至らずに境という水の波間に落ちる。[64-67]

「これは明日すべきである。これはすぐ後にすべきである。これはどこかですべきである」と人が考えるならば、ヤマ天の棍棒が足りないと縁から見て、赤い眼で怒り、喜ばせず、笑いなさい。[68-71]

すべての瑜伽行派の論書と多くの行を正しく知っても、「今日すべきである。明日すべきである」と言い、思いをもって死ぬであろう。[72-75]

寿命には多くの害があり、風で広がった水の泡よりも無常であるならば、息を吐き、息を吸うことで睡眠による顛倒から眼を覚まし、そこにあるものは何でもとても珍しい。[76-79]

おい、さあ友らよ！

寿命は東の間であり、知るべき相は多く、寿命の量もどれほどか知らないの、鷲鳥が水から乳を取るように、自分の望むものを自分のために取りなさい。[80-83]

おい、さあ、友らよ！

世間の所行を興味深く見たならば、一切の所作は無意味で、苦の原因である。何を考えても利益にならないので、自らの心を見ることを修習しなさい。[84-87]

おい、さあ、友らよ！

「七種の因明と四種の声明とアビダルマと『瑜伽師地論』と、経と律とアビサマヤの文献に述べられるものを残らずすべて、見ず、聞かず、解説せず、書かない」と言う。[88-92]

それを求めることを起こさない美形の者たちよ、「師の概説」と言われるものは甘露の味である。三味に入る者はそれだけで、正しく求めるべき多くの文献に何が必要であろう。[93-96]

一切の意は、迷乱させる原因である。この輪廻の場所は不確定であるから、父母などが父母として確定しないので、親族関係に執着することを捨てなさい。敵も不確定なので、彼を憎むことを捨てなさい。[97-101]

病気がなく、円満な壮年で、五欲樂に自性により執着することを捨てなさい。利得と尊敬と名声と種姓と姓名と偈頌を捨てなさい。弟子も学ぶ法の関係を捨てなさい。[102-106]

おい、さあ、友らよ！

世間は虎と蛇と火と毒に似ていると考えてから、捨てて、寂処に住すべきである。女性の特徴と人の特徴と薬と象を考察したり、星宿と暦と武器を考察したり、馬の形を臆説したり、悪い論書を学び、読誦することを捨てるべきである。[107-112]

境を明らかに喜ぶ心が生じ、それらの分別が生じたならば、自分は確実に死ぬことを記憶すべきであり、後から生じる諸対治により退けるべきである。[113-116]

多くの分別を、息を数えることにより制圧し、貪欲の心が生じた分別を、本質は不浄なる骨格と見ることで退けるべきである。[117-119]

怒りに対して慈愛の水を注ぎ、愚かさに対しては縁起の道による。不浄と慈愛と縁起の概説を師の御前から生じた通りになすべきである。[120-123]

『輪廻から意を出離させるという歌』偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナの著作を完成した。

インドのその賢者自身と、偉大な翻訳官のギャ・ツォンドウ・センゲがヴィクラマシーラ寺院において翻訳した。後にその師自身と翻訳官のツルティム・ゲルワが改訂し、決定した。

『行歌』和訳

インドの言葉で、*Caryāgiti*

チベットの言葉で、『行歌』

聖マンジュシュリー童子に帰依する。

吉祥なる金剛座に帰依する。

影像に似ているものが、有情の存在である。自らの本質を考察するならば、自性は存在しないものである。自らの本質は影像に似ているという認識を起こさないで、さあ、愚かな心で汝は無知でいないように。[1-4]

無垢なる虚空と広大な宝と鏡に関して、そこには明らかに顕現する自分と一切の有情がいる。例えば凡夫が影像に迷乱するように、自他を区別する迷乱にどうして住するのか。影像を常に認識し、分別する者は、家畜と同じで影に抵抗するものである。[5-10]

マンダラの輪の修習を堅固にするべきであり、真実を知るヨーギンはここには住しない。述べられるべきものは「最高なる大楽」と言われ、そのマンダラをまとめて、堅固にするべきである。[11-14]

汝が考察し、起こした在り方のものを、真実の本質であるところのように考えるであろうか。真実の本質を正しく知らない限り、無上菩提がどのように成立しようか。分別という戲論はすべて実体のないものであり、それらは最高なる大楽の本質である。[15-20]

世間の八法は等しく、三味の資糧に住するようになるべきである。住するならば、とても清浄になり、戲論の行はすべて捨てられるべきものである。[21-24]

種々なる分別により起こされた実体は、最高なる清浄の本質ではない。戯論と分別はすべて存在するものではなく、それが真如で、最高なものになる浄化される実体である。[25-28]

真如の三昧は大火が燃えることであり、煩惱という藁をすべて燃やすものである。世間を正しく知るようになれば、その時に一切の有情は虚空のようになる。[29-32]

有情の本質を、虚空のように眩惑し、分別という眼翳により愚かさを起こさないように。以前のものに似ている有情は、後も同じであり、前世と来世と現世には差別は存在しない。[33-36]

眼翳を持つ者が、虚空に髪の毛を見ることと、分別という眼翳で世間を見ることに差別は存在しない。分別の本質は虚空と同じ本質である。考察される本質をすべて修習しなさい。[37-40]

罪過の異熟は、盗賊を恐れて見ることで、さあ、戒律という大宝を守るために夜警しなさい。存在という長い夜に愚かに寝てしまうことで、さあ、心が放逸しないように夜警しなさい。[41-44]

太陽がなければ昼が存在しないように、戒という宝を離れて禅定がどこに存在しようか。寝室に盗賊が入ることにより、さあ、汝の戒の宝が盗まれてはいけないから。[45-48]

刹那さえも悪い行為に執着せず、真実という太陽が登らない間は、夜警しなさい。真実という太陽が昇らない限りは、存在を宝のようにどうして喜んで行じようか。[49-52]

我とは、有情とか汝などというものであり、自他を区別する内なる害をなすべきではない。分別というこの内なる害を打ち負かすべきであり、毒蛇のように甘露味により静められるべきである。[53-56]

内なる害は多くの頭がある毒蛇のようであり、すべての有情の種々なる分別を知ったならば、その真如の「甘露味」と言うものは大ヨーガの心の休息の場となるものである。[57-60]

大甘露味を常に味わうならば、大楽の最高の涅槃を知るであろう。裸行者と火儀をなす者はバラモンではなく、長髪を受け入れており、種姓と相続によるのではない。[61-64]

「身口意を浄化した者はバラモンである」とブッダはお説きになられている。十の罪過となるものを捨てるべきで、十善の功德の力を備えるべきである。[65-68]

低い種姓に生まれても、何時であれこれが死なない間は非法を行うべきではない。忍法を保持することで怒りに打ち勝ち、境の楽を望むことをすべて捨てるべきである。[69-72]

楽の法の海に常に浴するべきで、欲望の過失と恐れと無知を起こすべきではない。繰り返し骨格に乗ることをし、常に不浄が漏れることを障害により感受しないのか。[73-76]

有の有情が明らかに顕現して、それも顕現のみから意味として成立したものは何もない。それ故に、

自らの本質を考察したならば、自性は存在するものではない。[2]

と言う。「どのように考察により存在しないと知るのか」と言えば、我と三界自身の本質は影像のように顕現のみとして知り、生じないと知る。

それは、「さあ [4]」と叫んでから、教授する。「影像を迷乱せず、影像の自性を知らないままでいない」と言うことである。

そのようにまとめて説いてから喩例の意味の特徴を詳しく説くために、

無垢なる虚空と [5]、

などと言い、無垢なる虚空と宝と清浄な鏡のような三つにまとめてから、影像が顕現するそのように心と風と業と無明から我と三界の影像が顕現する。それを迷乱して、常や真実と認識することは、獅子が自分の影を横切つて海で死んでしまうのと同じで愚かである。また印を知らない童子が自分の影像を引っ搔くのと同じで、愚かである。そのように我と三界が影像のように顕現することを自と他とに何故に迷乱しよう。「迷乱しない」と言う。それも經典に、

鏡に自分が顕現しても、そこには存在しないように、そのようなものが諸事物の本質である。

と述べられ、また、

対象が存在しないことが心自身で、習気により搔き乱された意は、対象に顕現が生じたものである。

と説かれているので、我と三界の事物となるこちら側に見える知と所知を残らず虚空の花のように知るべきである。

今度は有の自性を見ることに関して、

マンダラの輪の修習を堅固にすべきで、[11]

と言うそれに五つ。縁起に力があることと、そうであることと、それを知ることと、それを修習することと、加持が生じることである。そのように有ではない対象を除いてから心と風の両者が無漏の功德により特別に作られた時に、依ることと依られる天の輪として顕現し、取の原因である心と同時になす縁の風と無漏の功德の三つにまとめてから意生身は幻などとして顕現する。それも本質として無漏の一切の功德の自性であることを知らなければ、存在しないものである。それも認識をする真実の善友に依存してから自分は加持の本質としての三喩と十二の門から述べて認識し、それも五根に関して修習して、それから加持の一切法は幻のように顕現するという確実な認識が生じる。他の天による守護などはアーリヤデーヴァによる解説から知るべきである。

真実を知るヨーガ行者はそこにいない。[12]

と言うのは、幻と知っても、幻により作られた女性に対する執着が生じるのと同じく、執着が存在するので、光明により浄化すべきである。

述べられるべきものは「最高の大楽」と言われ、[13]

と言う二語は理解しやすい。

汝が考察し、起こした在り方であるもの [15]

とは、二諦の相をとまわらない考察されたヨーガを否定しており、理解しやすい。

真実の本質を知らない限り、無上菩提がどのように成立しようか。[17-18]

とは、光明と双入とである。

分別という戲論はすべて存在するものではない。[19]

とは、世間の106心である。「それらは最高なる大楽が光明の自性により浄化されたものである」と言われる。その原因は何かと言えば、

世間の八法を平等になし、三味の最高に住するようになる。[21-22]

それに二つ。共通なる資糧は、戒をそなえ、財産に頼らず、忍をもち、誓願を堅固にし、喧騒を捨て、正知をもち、二諦を乱すことなく記憶し、なすべきこととそうでないことを知り、五障を捨て、食事の量を知り、世間の行に智慧を休めて行くことである。共通ではないものは、四根をよく得て、菩提心を堅固にし、師を尊敬することである。そのような資糧に住して、身口意の三つと三障がとても浄化され、

戲論の行がすべて捨てられる。分別 [により] [24-25]

という二語は、戲論のヨーガを否定しており、理解しやすい。

三有と、どこかに顕現する世間の心の戲論と、分別はすべて意味があるものではないので、それ故にその除かれたものは、その通りに、

最高なものに浄化される本質である。[28]

そして五根に応じる三味の火により煩惱の蘂という世間の心が燃やされるので、何時であれ三世間と世間の諸の心を虚空の中央のように正しく知る時に、すべての有情の分別が沈んでから虚空のように成立する。そのように一切法の顕現に対する確実な認識が生じる垢を浄化しなければならないとお説きになられている。

分別と言う眼翳により愚かさを起こさないように。[34]

と言う。それは何故かと言えば、三有情は自性を浄化しながら特殊性は何もないのに、分別により区別されている。その意味を詳しく説くために「眼翳者」[37] などと言われ、理解しやすい。

今度は、光明の三味により業と煩惱が生じることを浄化しない間は、とても微細な業果も避けなければならないことを示すために、

罪過の異熟は盜賊を恐れて見ることにより [41]

などと言われ、理解しやすい。

真実という太陽の光明の三昧により業の働きを断じてから、その忍をそなえるように、自らの相続において善心を完成させるなどの時に、それは不要なので、

その限りどうして喜んで行じようか。[52]

と言われる。それ故に「その限り」などと言われ、理解しやすい。

そのように見解と行を浄化した者を、

バラモン [66]

と言うが、種姓などではないことを説くために、「裸行者」などと述べられ、理解しやすい。不退転の道をとまねば種姓に依存しないことを説くために、

低い種姓に生まれても [69]

などと言う。迷乱により常に輪廻するそのことから退くことを述べたものが、

繰り返し [75]

などと言うことにより結ばれて述べられている。「さあ」と叫んでから、

考えなさい。汝は自分で自分の垢を洗い落とし [80]

と言うことについて、顔の汚れを鏡で見てから取り除くように、鏡と同じ師と水と同じ解説により無明の垢が付着したものを尽くすべきである。それ故に師の解説の水により分別の垢を洗い落とすべきである。在り方はどのようなのかと言えば、

考えなさい。汝は正しく理解することで自分を正しく見て、無知の大きな垢を浄化すべきである。[83-84]

と述べ、一切法を心と風の変化と理解すべきで、自己に対する自己であり、風と心の自性に入り、「虚空と同じように見なさい」と言われる。そのようなムニの説法を聞かず、その不幸は火のように顕現する。それ故に確実に世間の彼岸に行かなければならないと決意し、ムニの説法である菩提心などを聞き、修習すべきである。それを聞いてからそれと矛盾する業をなさない。無間地獄に対して、そうではない者は誰も把握できないから。それを聞いた後にそのように浄化してから時期の結果である善趣において究極の結果である菩提を得る。無明の闇に対する法で、帰依と菩提心などと、最後の大楽の三昧までが灯火である。自性により光り輝いているから。それ故に存在の大海から救い出す船と筏なので、確かに頼って修習すべきである。

【行歌注】を完成した。

パンディタであるディーパンカラと翻訳官のツルティム・ゲルワが翻訳した。

『法界見歌』和訳

インドの言葉で、*Dharmadhātudarśanagīti*

チベットの言葉で、『法界見歌』

一切智者に敬礼する。

誰であれすべてを知らなければ、三有を輪廻するので、一切衆生に確かにある法界に敬礼してから、法界を見て他のものを見ずに、それらを順序通りに述べるべきである。[1-6]

甚深で寂靜で戲論を離れた真如で、光り輝き、無為なるものは、不生・不滅で本来より清浄であり、自性は涅槃である。[7-10]

法界は辺際と中心がなく、微細で、分別を離れ、沈みこみと昂ぶりと翳のない知恵の目で見る。[11-13]

輪廻の原因となったそのものを浄化した後に、その浄化が涅槃であり、法身も同じである。[14-17]

例えば牛乳を混ぜてもバターのコアは顕われないように、煩惱を混ぜても法界も見えない。[18-21]

例えば牛乳を浄化することでバターのコアが無垢となるように、煩惱を浄化することにより法界はとて無垢になる。[22-25]

例えば灯火が容器の中にあればわずかたりとも見えないように、煩惱が容器の中にあれば法界も見えない。[26-29]

あらゆる方向から瓶の穴が作られて、それぞれの方向から光の自性が生じるであろう。[30-33]

三昧という金剛がその瓶自身を破壊した時、それは虚空の辺際にまで顕れる。[34-37]

法界は不生であり、決して滅することがない。いかなる時も煩惱がなく、最初と中間と最後に垢を離れている。[38-41]

例えば瑠璃宝は一切時において光輝いても、宝石の内部ではその光は輝いていない。そのように煩惱に覆われた法界は垢がなくとも、周りに光輝いていない。[42-48]

例えば殻により遮断された大麦は実を望めないように、煩惱により遮断されたそれは仏を認識することが考えられない。[49-52]

例えば殻から抜け出せば実が現れるように、そのように煩惱から解脱するならば、法身自身が輝く。[53-56]

例えば妊婦の胎内に子供がいても見えないように、煩惱に覆われた法界も見えない。[57-60]

法界は我でなく、女性でなく、男性でなく、一切の所取から解放されているので、どうして能取として考察されるのか。[61-64]

不浄と無常と苦という三種により心が浄化される。空性は師の経典で、勝者が説かれたものである。[65-68]

それらはすべて煩惱を退けており、その界を損なうものではない。その心を浄化する最高の法は無自性である。[69-72]

例えば兎の頭にある角は考察されるものであっても、存在するものではないように、一切の法も考察されるものであっても、存在するものではない。[73-76]

極微の塵の自性により牛の角も知覚できないように、どうして前者の通りに後者もなるか。それを考察することがどうしてなされようか。[77-80]

依存してから生じるものと依存してから滅するものと存続し続けるものも存在するものでなければ、凡夫がどのように考察しようか。[81-84]

法界の自性は、虚空界のように無因で無縁で、生・老・住・滅がなく、無為である。[85-88]

仏法は区別がなく、その種姓はそのまま得られ、虚妄がなく、欺瞞がなく、妨害がないので、初めから自性が寂靜である。[89-92]

それは大海のように言葉と喩例と知恵により底と対岸は得られないので、とても甚深なものである。[93-96]

法界に区別がないので相違する見解は適切ではない。しかしながら知恵の区別により相違する見解がわずかのみ述べられる。[97-100]

中観論者たちは、その意味を二諦として主張する。世俗と勝義である。[101-103]

二諦の区別を知る者たちは、ムニのお言葉を不明瞭にしていない。彼らはすべての資糧を集めてから円満なる彼岸に赴いた者である。[104-107]

我と我所と、常と断と、煩惱と浄化、原因と結果、能取と所取としての戲論が世俗諦である。[108-111]

空性と無我と寂靜たるもので、戲論により汚されず、相違する意味がなく、無分別たるものが、勝義諦である。[112-115]

完全なものと不完全なもの、異門と異門ではないものによりその二つをそれぞれ区別するべきである。[116-118]

考察されただけのものと顕現したものと知られたものと事物と言説と迷乱と幻と世俗たるものが、[世俗諦の] 異門である。[119-121]

空性と完全なものと究極と無相と勝義と法界が、[勝義諦の] 異門である。[122-124]

障疑により世俗であり、変化がないので勝義である。完全なるものと不完全なるものの

認識が二つなので、二諦である。[125-128]

完全なる認識はないと言うのならば、真実であり、言説としてのみ存在するのである。真実を求める者には、最初に一切は存在すると述べられる。意味が考察され、執着がなく、後に寂静の意味となる。[129-134]

二諦は、同一でも異なるものでもなく、四四の過失が説かれているから。同一と相違を分別する者は、不合理に入るものである。[135-138]

事物と認められるものが存在するならば、貪欲と忿怒が尽きることなく生じ、正しくない見解に執着して、それから生じた論争となる。[139-142]

所縁の想をもつ者には、得がなく、現観がない。随順する忍も存在しなければ、涅槃を説く必要があろうか。[143-146]

空性を見ることに過失があると言うならば、少ない智慧の者は衰亡するであろう。例えば蛇を把握した過失と、明呪を誤って成立させもののようなものである。[147-150]

すべての勝者により、空性はすべての見解を確実に取り除くと説かれている。空性を見る者は、成就を無と説かれている。[151-154]

自己の存在と他の存在を存在とか非存在と見る者は、ブッダが説かれたものを完全なるものと見ていない。[155-158]

非存在は存在の反対により導かれたものであり、存在も非存在の反対により導かれたものなので、それ故に非存在と述べるべきではないし、存在するものとしても考察すべきではない。[159-162]

存在論者は善趣に行く。非存在論者は悪趣に行く。真実の通りに正しく知るので、二に依存しないものは解脱するであろう。[163-166]

二つの在り方の車に乗ってから正理の手綱を保持する者は、それ故に意味のままに、大乘たるものを得る。[167-170]

色などがありのまま顕現してから善趣の間はすべての法を兔と牛の角の喩例により中たるものを修習すべきである。[171-174]

有でなく、無でなく、有無でなく、二でなく、我としても存在せず、四辺から確実に解放されているものが中と賢者はお認めになられている。[175-178]

中が辺際から解放されているならば、辺際を離れているので、中も存在しない。辺際と中が存在しないと見る者は真実を見て、無上の見解である。[179-183]

知恵をもつ者は常に修習しており、その見解に入る者は一切智を得る。[184-186]

唯識論者は、自性を三と主張する。遍計所執性と依他起性と円成就性である。考察されたものと原因から生じたものと変化しないものなので、順序通りである。[187-191]

考察することにより事物は考察される。その遍計所執の自性はそれが存在しないことで

ある。[192-195]

依他起性は分別であり、縁から生じたものである。円成就性はそれに先行している。常に非存在となるものである。[196-199]

有と無の二極により、それ故にそれ自身は依他起性より異なるものではなく、異ならないものでもない。無常などの通りに述べられる。水晶や瑠璃の喩例により三性説を知るべきである。[200-205]

我と法として考察され、清浄と不浄、不変と不顛倒、順序通りそれぞれ二つずつである。[206-209]

一切のよい智慧のある者は内心を精進する。所取と能取から解放された識は勝義において存在する。[210-213]

諸法はいかなるものも生と滅は僅かたりとも存在しない。識だけが生じ滅するのである。[214-217]

それらの存在しない諸法は顕現するが、無生物からでなく、他からではなく、無からではなく、二つの過失があるので、それ故に識の自体が存在するのである。[218-221]

識は無生物の自性とは別に明らかに生じるものである。非生物でなければ、その自性はここでは自体を知るものと認められる。[222-225]

虚空と大地と風と太陽と海と方向と大河は完全なる内部の心の一部であり、外部のもののように顕現している。[226-229]

明らかな自性として顕現するので、それらと関係したものは隠されることがない。関係により知るものは、その知られるべきものを知るであろう。[230-233]

「剣の刃と指先のように知恵により自身が把握したものを捨てるならば、自身の顕現を捨てるのではない」と『解深密経』に説かれている。[234-237]

それ故に知恵の相は自証として成立するものである。それ自身を認識することは難しいので、この性質は考察できない。[238-241]

その自証も微細なので、諸仏は微細なものと見られている。自らに存在しても、自らに似ているものにより妨げられているので見えるものではない。[242-245]

顕現と知恵は自体との関係があるので、知恵のみである。識の自性は真実であり、相が虚妄と迷乱である。[246-249]

心が混乱しているので、一つのものが二つとして顕現している。どうして所取と能取の区別をよく知るものではないのか。[250-253]

所取の相は動かないので、外部のもののように顕現している。能取の相はよく動くので、内部のもののように顕現している。その特徴が捨てられてから、知恵を虚空のように修習すべきである。[254-259]

心の自性は無漏であり、有漏の種子は尽きることなく、アーラヤ識の住処でそれ自身が尽きてから無漏の界になる。[260-263]

解脱身と、常に太陽と日光のように仏法は存在するので、救済者の法身である。[264-267]

声聞乗に入る者たちは、我と我所を離れ、蘊と界と処と、五根と三時もあてはまる。[268-271]

一切の存在は把握されるものである。所縁をもつものにより把握するのである。その両者は勝義として認められる。[272-274]

真実を見て修習した後に煩悩が捨てられると解説される。諦は四種である。苦と同じく集と滅と道であって、その如くならばそれらは現観の順序通りである。[275-280]

苦は領受される蘊である。集は業と煩悩である。滅は二つの涅槃である。道は三十七分法である。[281-284]

戒の住処は、聞と思をともない、修を正しく修行すべきである。沙門の在り方は無垢なる道であり、結果は有為と無為である。[285-288]

それらは89である。解脱道は、尽きることをともなっている。四果が設定されれば、五因がありうるから。[289-292]

声聞は四種である。変化と円満菩提になるものと一向趣と宗義を保持するものとである。それは、二と四と十八である。二とは、毘婆沙師と同じく経量部である。[293-298]

「無相の識により色などの対象を知る」と主張する者が毘婆沙師である。「何らかの対象により設定された色の影像を領受することで対象を知る」と主張する者が経量部である。[299-304]

四は、大衆部と説一切有部と上座部と正量部である。十八は、東山部と西山部と雪山部と出世説部と施設部との五部が大衆部である。[305-311]

根本一切有部と迦葉部と化地部と法護部と多聞部と紅衣部と分別説部が、説一切有部である。[312-316]

祇多林部と無畏部と大伽藍部が上座部である。商拘梨柯部と不可棄部と犢子部が正量部の三種である。場所と目的と師の区別により異なる十八である。[317-323]

独覚の菩提を求める者は、所取の分別を捨て、能取を捨てないので、所依の犀のような道を百劫の辺際まで修習することで菩提に触れるであろう。[324-329]

彼は縁起の十二支分を三部にする。先と後の二つずつと中間の八つとで完備される。[330-333]

無明は、前世の煩悩であり、行は前世の業であり、識は、結合した蘊である。名色は、それ以後である。[334-337]

六処は、出現以後である。それは三つが過ぎてからである。触は、楽と苦などの原因を認識できてからである。[338-341]

受は、性交より前である。愛は、享受と性交と貪欲をもつことで、取は、享受を得るために走ることである。[342-345]

その存在が結果として生じることになるその業自身が有である。昼夜結合することが生である。受の間が老死である。[346-349]

これは期間として認められている。最高のものなので支分が述べられている。前と後と中間において障害を退けているからである。[350-353]

煩悩は三種で、業は二種である。事は七種で、その通りに結果である。原因と結果の二つにまとめられる中間の推測からである。[354-357]

ここに生じるものが原因であり、生じたものが結果として認められる。それら十二支分のうち、原因が五種で、結果が七種である。[358-361]

投げるものと投げられたものと明らかに成立させるものと成立したものと過失の支分であり、三と四と三と一と一が順序通りである。[362-365]

行苦と壊苦と苦苦が順序通り、五と二と五である。[366-368]

三界では、順序通り、十二と十一と十により入る。化生は十一支分により、胎生と卵生は十二により、暖生と湿生は何れかの種に入る。そのように五趣に合わせられる。[369-374]

三から二つが生じて、二から七つが生じて、七からも三が生じて、その存在の輪も何度も廻る。[375-378]

輪廻の本質と相は、何れかのものが、何れかの場所で、何れかのものにより、どのようにかして、有らん限りの無限の過失の集まりにより入ることである。[379-382]

始めるべきで、生じるべきで、仏法に入るべきである。葦の家にいる象のように、死の主を裂くべきである。[383-386]

不放逸にこの法と律を行じる者は、生の輪を正しく捨ててから 苦を最後になすであろう。[387-390]

涅槃とは、何れかのものが、何れかのものにより、何れかの時に、何れかのところで、何れかの理由で、どのようにかして、有らん限りの本質と相と得たものと区別と働きと功德の集まりにより退けることである。[391-396]

外道は二種である。変化する者と自ら相続する者である。それは、生を得るものと結合して生じるものとである。[397-399]

生を得たものは種姓を罰し、邪見への愛着を持つもので、結合により生じたものは禪定と論理学である。禪定は神通力により六十二見として考察される。[400-403]

常住を説く四と、ある部分を常住と説く四と、辺際が存在するなどの四と、懷疑論の四と、無因の二つは、過去の辺際を考察するものである。[404-407]

想が存在すると説く十六と、存在しないと説く八と、同じく存在するものでもなく存在しないものでもないと説く八と、断滅を説く七と、現世での涅槃を説く五とが未来の辺際を考察する見解である。[408-413]

論理学者は、サーンキヤ学派などである。量による宗義を保持している。サーンキヤ学派は、三種のグナを述べている。純質と動質と暗質である。[414-417]

喜悦と喜びと歎息と楽と寂靜の心が時々顕われる。それらが純質のグナである。[418-421]

不喜と苦しみと悲痛と欲望と耐えられないことがどこかに顕現する証因によりそれらが動質の特徴と認められる。[422-425]

妄想と同じく憂鬱と放逸と睡眠と動くことが何度も顕現する。それらが暗質のグナである。[426-429]

三つのグナの自性は最高であり、見える道に成立するものではない。見える道に成立するものは幻のように集められたものである。[430-433]

自性から大が、それから三種の自大が生じる。それから十一器官と五微細元素が、その五から五粗大元素が生じ、二十四が根本原質と相となる。[434-439]

それらは心があるものではない。プルシャは、一切を知る心をもつものである。それらを二十五と知るならば、長髪や頭頂や髪房の者が何れかの住居でそれを喜んで解脱することは、ここでは疑いが無い。[440-445]

ヴァイシェーシカ学派は六を主張する。実体と性質と運動と普遍と特殊と内属関係の六種である。[446-448]

実体は九、性質は二十四、運動は五、普遍は二、特殊は二、同じく内属関係も二種である。真実の六を知ることが知識の最高であり、すべてのヴェーダの完成したものである。[449-453]

裸行派の者は九義を説く。命と漏と律と確実な老いと死と業と罪過と福德と解脱という九義である。見た者は清浄である。[454-459]

ニヤーヤ学派は、十六義を主張する。認識手段と認識対象と疑惑と目的と喩例と定説と論証肢と吟味と決定と論議と論争と論詰と誤った理由と詭弁と誤った非難と論破とであって、十六により確実に生じている。[460-467]

ミーマーンサ学派は、四義を述べる。地と水と火と風であり、それらは無為であり、常に生滅がなく存続するので、それ故に業果は存在しない。最初と最後の辺際も同様に存在しない。そのように考察する者は見るだけで解脱するであろう。[468-475]

ヴィシュヌを創造主と説く者たちは、太陽の中にヴィシュヌが入っている。星の中では光がある月であり、風の中では自分は光線をもつ者であり、光を放つもでは太陽である。
[476-480]

ヴェーダの中では【サーマ・ヴェーダ】であり、天の中ではインドラであり、感覚器官の中では意である。大種の中では地であり、主は安穩を作るルドラでもある。[481-485]

ラクシャとヤクシャの中では財主であり、財天の中では火天であり、主は山の中ではメール山であり、主は文字の中では「あ」である。[486-489]

魚と亀と野猪と人獅子と矮人とバラシュラーマと、ラーマと、クリシュナとブッダとカルキンの十である。ヴィシュヌの功徳を常に修習すれば安穩を得るであろう。[490-495]

シヴァを創造主と主張する者たちは、これらの一切の有情の造作主がシヴァである。[496-498]

彼は八つの功徳を持っている。微細と軽さと最高に値し主にあり、支配者となり、どこにも至り、所欲をもち、同じく喜愛して住する。[499-503]

手と足と眼と顔と身体により多くのものを生み、破壊するので、それ故に微細と述べられている。[504-507]

虚空と風と大地と水と火が存在するようにして、集め、広げるので、それ故に軽いと述べられている。[508-511]

三種の間での最高となり、とどまるものと動くものと一切の生物により敬われるので、それ故に最高に値するものである。[512-515]

一切の生物を支配し、とどまるものと動くものと、望むことは何でも作るので、それ故に「主たるもの」と呼ばれる。[516-519]

自分に依存し、自分を自在にし、誰に対しても恐怖があることがなく、一切を支配するので、それ故に「支配者」と言われる。[520-523]

さらにまた意により思われたものを意に追隨して行くものを集めずに¹²、天界に行くすべてのものに遍満するので、それ故に「どこにも至る」と言われる。[524-527]

精力と微細と闇の三つがどこにおいても存在するように眼を開くだけでなすことになるので、それ故に「所欲をもつ」と言われる。[528-531]

解脱してもさらにまた天の身体でも、自分自身が望むものと一切が望むことものは何でも得られるので、それ故に「喜愛して住する」と言われる。[532-535]

微細となって一人で生まれてから存在し、彼はこのすべての生と滅をなす。彼は自在主

12 この2パーダは、デルゲ版の「アティシャ小部集」所収のテキスト以外では欠けており、何らかの根拠によりこの句を補ったものと思われ、そこには、「一つの喩例の次の二パーダが出ている」と言う語が付されている。

で、最高の布施と天の供養をなし、功德を作る者は、寂靜を得る。[536-539]

この人には知恵がない。自分の楽と苦を自分で制御することがなく、自在天が送られても天界や深淵に行くだけであろう。[540-543]

自在天が陶工のようにこの種々なる変化をなすものでなければ、この山は成立せず、この大地はなく、大海もない。この太陽と月をもつもののようなこの莊嚴は視界に存在しないだろう。存在するので、「自在天は有情を作るもの」とある者が言う。[544-547]

微細で不可思議な薄いものを作り、すべてを知り、すべてをなす、ヨーガの修習により得た知恵を持つ禪定者の禪定の対象である。太陽と月と地と水と火と風と方向と虚空の身体をもつ。寂靜の楽と喜びを求める者は自在天を修習すべきである。[548-551]

時を見ることを説く者たちは、一切の事物は時により変化するものとする。叔父が財天で父のダナンジャヤである者は畏怖がなく怒りがなくても殺されるので、時は越え難いものである。[552-557]

大種は時によりもたらされ、九生のものを集めることを時がなし、時は睡眠を退けて起こすので、時は越え難いものである。[558-561]

守護者が三つの物語で、塚が大海で、歩兵の人が羅刹で、財産が増長天で、論書を取り除いた量が同じその羅婆那も、時の力により損なわれる。[562-565]

自性因を説く者は、諸事物は自性により成立するとする。火の赤さと聖者の利他性と正しくない御心がないこととの三つは自性により成立したものである。[566-571]

角が鋭くなるのは誰が作ったのか。獣や鳥の模様は誰が作ったのか。砂糖黍の甘さと山豆根の苦さとこのこれらはすべて自性により成立したものである。[572-575]

太陽の暖かさと月の涼しさと人の執着とムニのそうではないことと楽の満足さと苦の苦痛のこれらの六つが自性により成立したものである。[576-579]

無因を説く者は、一切が原因に依存することはなく諸事物は生じるとする。[580-582]

太陽と蓮華の雌蕊など種々なるものは誰が作ったのか。孔雀の羽の目などの種々なるものも誰が作ったのか。[583-586]

例えば雨や風などは突然生じるので無因であるように、苦などは原因のないものである。[587-589]

とても広大で深淵なものを怠惰で浄化せず自他を説く者たちは痴によりそのように大乘を非難する。[590-593]

戒より上の状態であるが、正見からは何もない。戒により天界に行く。正見により位も最高になるであろう。[594-597]

痴により妨げられ、完全に障害をなす者には、善趣もなく、解脱もないとどうして言う必要があるか。[598-601]

損害の種子になる外道がなしたものを多く見てから、解脱を求める者には、悲心が成立することがあろうか。それ故に解脱を求める者たちは法界を見るべきである。[602-607]

『法界見歌』という偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成した。インドの賢者自身とチベットの翻訳官で比丘のツルティム・ゲルワが翻訳した。

『ディーパンカラシュリージュニャーナ法歌』

仏に帰依する。

分別という世間の盗賊への恐怖を認識するならば、戒という宝を守るために夜警しなさい。
さあ、怠惰をなさないという心の夜警により痴と睡眠による輪廻の夜を離れなさい。

さあ、怠惰をなさないという心の夜警しなさい。眠ってしまえば、家の中に盗賊が来て、汝の戒という大宝を奪うであろう。その戒という宝がなければ三昧はない。

それがなければ、陽が上ることはない。真実の陽を修習することで夜警しなさい。

一刹那もわずかな宝を他になさず、その時に真実の陽が上り、このようにその時に輪廻の夜明けが成立する。さあ、怠惰をなさない心の夜警をしなさい。

『ディーパンカラシュリージュニャーナの法の歌』を完成する。

〈キーワード〉 Dīpaṃkaraśrījñāna, Atiśa, gīti, *Samsāramanoniryāṇīkāranāmasaṃgīti*,
Caryāgīti, *Dharmadhātudarśanaṅgīti*, *Vajrāsanavajragīti*, *Dīpaṃkaraśrījñānadharmagīti*